

5-2 ねぐらのコントロール手法の検討(案)

- ◆ 出水で多数のツルが越冬可能な要因として、餌, ねぐら, 安全な空間がある。
- ◆ ねぐら面積を変化させることにより、ツル類の自発的な新越冬地への渡りを促す。
- ◆ 実施した際のツルの行動の予測が難しいことから、徐々に試行を繰り返し、その結果を次の試行に反映させ、順応的に行うことが必要。

1 手法の検討

1) ねぐら面積の縮小

- ◆ 現状でも東干拓のねぐらに攪乱が起きた際、全個体での荒崎のねぐらを利用可能なことから、この手法のみでは、かなり極端な削減が必要と考えられる。また、ねぐらでのツルの密度が上がり、感染症リスクも上がる懸念がある。
- ◆ 一方で、給餌のコントロールと組み合わせることで、日中広く分散した個体が、その周辺で小規模なねぐらを形成する可能性が考えられる。さらに休遊地以外にねぐらをとった場合、夜間の攪乱等が新越冬地への渡りのきっかけとなる。

2) ねぐらの水張り時期のコントロール

- ◆ 越冬初期には、ねぐらの利用があまり行われない事がある（例 2013 年 11 月 19 日には、80 羽のナベヅルが日中滞在していたが、東干拓のねぐらに数羽が入っただけで、夜間の居場所は不明）。
- ◆ 個体数が増加する時期まで、ねぐらへの水張りを遅らせると、休遊地以外にもねぐらが形成される可能性があり、夜間の攪乱を受けやすい状況となる。また、ねぐらの適地面積が小さいことから、少数での群れを形成し、群れでの分散を促進する可能性も考えられる。

2 必要な調査等

- ◆ ねぐらを縮小した場合のツル類の行動変化、分散域の予測
- ◆ 小規模ねぐらの実態調査
- ◆ 夜間の群れの把握及び休遊地以外でねぐらをとった個体の日中の行動調査